

丘のまちに生きる人々と観光

ー北海道美瑛町における多様なホストの関わりー

川村悠華

キーワード：観光人類学 オーバーツーリズム ホスト/ゲスト 美瑛 農業

要旨

本稿は、北海道美瑛町において、「ホスト」という枠組みでは捉えられない地域の多様なアクターの関わりや実践を通して、観光の現場の様相を明らかにすることを目的とした研究である。

第1章では、研究背景と研究設問について述べる。第2章では、美瑛町に関する概要と、近年美瑛の観光で問題となっている「オーバーツーリズム」について、用語の整理と美瑛での現状について述べる。第3章では、観光における「ホスト/ゲスト」論についての先行研究と、「ホスト/ゲスト」間に存在する力関係について論じた研究を参照し、「ホスト/ゲスト」枠組みの課題と、その修正論に関する研究を述べる。そして、美瑛の観光の先行研究を参照する。第4章では本研究の調査概要と調査協力者に関する情報の整理を行う。第5章から第8章では、美瑛の観光の現場や、農家、宿泊業者へのインタビュー調査の結果と分析について記述する。第9章では調査の結果と分析を総括し、観光地と農家、農家と宿泊業者、農家内の多様性について考察する。

美瑛の観光は、観光客と宿泊業者が農家から景観を搾取する構造を持ちつつも、農家は「抵抗」の実践によって、美瑛の観光や資源のあり方を揺るがす強力なアクターとして機能していることが分かった。美瑛の宿泊業者は移住者が多く、美瑛の「新住人」であり、古くからの住人である農家とは「景観の意味づけ」が異なっていた。両者は時に衝突や軋轢が生じることもあるが、両者の関係は「対立」という言葉では表せられない複雑な様相を呈していることも分かった。美瑛の地域住人の観光客への認識、態度は非常に多様であり、集団内でも全く異なる態度を示すことが分かった。美瑛の農家が持つ観光への態度は、「美瑛の農家」という集団属性からではなく、極めて個人化された経験と立場から形成されていることが明らかになった。このような多層のかつ個人化された態度の形成プロセスは、アンケートによる量的な質問項目だけでは決して捕捉できず、観光研究は、生業や個人的なネットワーク、生活空間における具体的な経験に焦点を当てた質的調査を通じて、「現場社会に存在する多様性」を解き明かす必要性があるという結論に至った。